

特集 文化会館を核とした文化のまちづくり

巻頭言 ● 6 文化会館に求められるもの・山崎正和

座談会 ● 8 文化会館を拠点とした

特色ある芸術文化活動の展開

・出席者 諸井 誠／衛 紀生／桜井俊幸／佐藤まじみ・司会 土居 正

論文 ● 18 文化会館とアート・マネージメント

「施設」から「装置」へ・美山良夫

● 22 文化会館は文化の発信・受信基地・川口 純

チャイ ● 26 ホールの運営とは・江戸京子

事例紹介① ● 28 音楽のまちづくりと公民館・田園ホールエローラ

事例紹介② ● 31 厚木こどもミュージカル・厚木市文化会館

事例紹介③ ● 34 武生国際音楽祭によるまちづくり・武生市文化センター

事例紹介④ ● 37 緑をバックに演劇村計画

小さな村から夢と希望をのせて演劇文化発信・島根県八雲村

事例紹介⑤ ● 40 「演劇の町」への自信の芽生え・岩手県湯田町教育委員会

解説 ● 43 文化庁による文化会館の支援施策・文化庁文化地域文化振興課

特別記事 これからの特殊教育諸学校施設づくり

● 46 特殊教育の展開と施設設備への期待・林 友三

解説 ● 48 これからの盲学校、聾学校及び養護学校施設づくり

・大臣官房文教施設部指導課

事例紹介① ● 50 視覚障害教育の専門機関としての機能を備えた学校

・東京都立久我山盲学校

事例紹介② ● 53 最新設備による聴覚障害児教育の充実・神奈川県立平塚ろう学校

事例紹介③ ● 56 太陽の光と仲よく学ぶ・群馬県太田市立太田養護学校

カラー

1 いま個性ある日の学校訪問記

・南種子町立南種子中学校（鹿児島県）

4 天然記念物成時記

・与那覇岳天然保護区域（沖縄県）

表2 名作シリーズ・多武峰曼茶羅

表3 文化財紹介

・紙本金地著色南蛮人渡来図

58 マタコ五十年記念式典を挙行

— 皇太子殿下・同妃殿下が御臨席

59 教育・文化と地域づくり⑦・滋賀県安曇川町

62 焦点—文教施策

64 人への道・増田四郎

65 私の本棚から・岸 國平

66 中教審ニュース

68 都道府県発—教育・学術・文化ニュース

・埼玉県・三重県・高知県・沖縄県

70 こんちにはばん・プラトカ・ウアンダ

72 アトラクター—我が国競技ボウルの最前線

・アーチェリー

74 科学はいま—理系へのいざば

・佐賀大学低平地防災研究センター

77 鑑賞席

・身体と表現 1920—1980

78 ポンビクセンター所蔵作品から

ぼくたちわたしたちのウィークエンド

・国立大雪青年の家

80 海外教育ニュース

82 文学のふるさと・山の温泉

— 千曲川のスケッチより

84 編集後記

座談会

文化会館を拠点とした 特色ある 芸術文化活動の展開

出席者
敬称略・発言順

諸井 誠

彩の国さいたま芸術劇場館長

衛 紀生

演劇評論家

桜井 俊幸

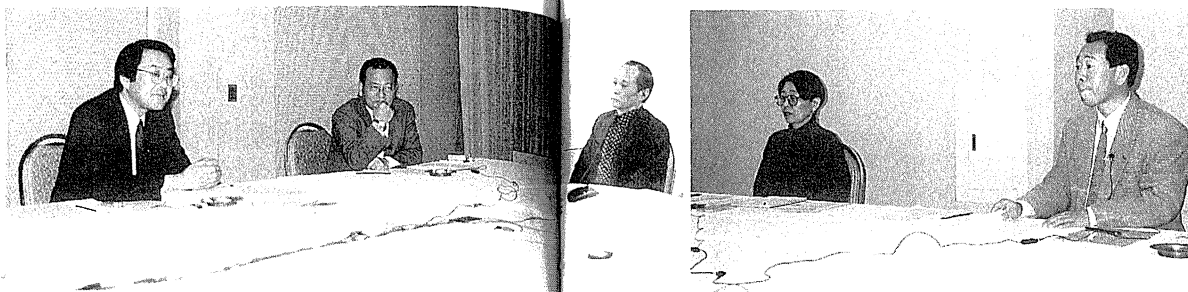
小出郷文化会館館長

佐藤 まいみ

財団法人神奈川芸術文化財団
プロデューサー

司会
土居 正

文化庁文化部地域文化振興課長



多目的性と専門性

展開」というテーマで、地域に根ざした特色のある芸術文化活動が活発に行われるようにするために、文化会館がどのような役割を果たしていくべきか、また、そのための具体的な手立てとしてどのような取組が必要かなどについて、現在活躍されている先生方から幅広い御意見を伺わせていただきたいと思います。

●土居 では、まず最初に諸井誠先生から、芸術文化活動を活性化していく上で、文化会館に期待されている役割をどのようにお考えになっているかについて御発言いただかせませんか。

●諸井 私が館長を務める「彩の国さいたま芸術劇場」は、一昨年の一〇月一五

●土居 先生方には大変お忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。御案内のとおり、文化庁では、文化は人として生きるあかし、生きがいであり、国がよって立つ基盤であるという認識に立って、二一世紀に向けた文化立国の実現を目指して芸術文化振興のための施策を計画的に推進しているところですが、そのための重要な政策課題が地域文化の振興です。地域における文化振興、特に地域に根ざした芸術文化活動の活性化を考える場合、文化会館はその拠点となる施設として大きな期待が寄せられています。

文化会館は、音楽、舞踊、演劇などの芸術文化の鑑賞や練習、発表のために使用する舞台と客席のあるホールを備えた施設ですが、近年、このような文化会館の整備が、各地方公共団体において進められてきており、ハード面ではかなり充実してきています。しかしながら、一方で、現在までのところ、文化会館が期待されている機能を十分に発揮していないところがあるという指摘もあります。

そこで、本日の座談会では、「文化会館を拠点とした特色ある芸術文化活動の日にオープンしたのですが、演劇、音楽、舞踊、映像の四つの分野において極めて専門性の高いホールから構成されています。私はいわば埼玉県の芸術監督でもありますので、この立場からは、広域的でトータルな芸術・文化への目配りが要求されるのですが、県内に七七ほどある他のホールの大部分は、従来型と言いますか、多目的ホールとしての性格が強いように思います。このように一口に劇場と言っても、専門性の高いホールと多目的ホールという大きな性格の違いがあり、それを同じ土俵で論じることができるのかということを一つ問題提起したいと思います。

全国的にみると、劇場の多くは多目的ホールですが、演劇に使う場合と音楽に使う場合とは音響や舞台構造などで全く違う条件が要求されます。にもかかわらず、同じホールでやってしまうところにも多目的ホールの問題があると思うんです。

そうした中で、芸術的に価値の高い作品を上演する時に起こる矛盾点や都合の悪い点について、運営上の問題と機能上の問題の両方を改め、県民のニーズにこたえるために作られたのが「彩の国さい

たま芸術劇場」のような新しいタイプの文化施設です。

水戸芸術館のように、市や町の規模で運営される劇場でも様々なホール運営の試みがなされています。住民のレベルやニーズへの適合性という観点からは、おそらく市町村の段階で運営されるほうが、都道府県が運営するよりも地元とはうまくいくのではないかと思います。県営の場合には全県的な目配りが必要になるので、市営、町営、村営の場合とはおのずと違った問題がありますから。

文化は基礎的なサービス

●土居 衛 紀生先生は演劇評論家として



諸井 誠氏

職員が半年間付き合ったことがあるんですが、このグループの公演が始まる時と終わった時の職員の様子を見ておみると、付き合いのなかった地元の劇団や東京の劇団が公演する時の表情とは全然違うんですね。父親のように落ち着かなくて、終わったあとは飛び上がるように喜んでいました。こういうことがホールにかかわる人の生きがいであり、醍醐味でもあると思います。職員の生きがいであると同時に住民の生きがいにもなる方法を今後考えていくべきです。文化会館がホールの貸付けばかりやっている間は絶対職員は生きがいを感じられませんよ。会館職員と利用者の関係が施設を管理するというのと、よりましなサービスを要求するという、なんとも非文化的な、生産的ではないことだけになってしまいます。

住民と文化会館

●土居 衛 先生は文化会館の事業に住民が主体的に参画して、事業を協同で作りに上げていくというような視点を出されましたが、桜井先生は企業経営に携わると同時にシンガーソングライターであって、

活躍され、また、いろいろな地域で文化会館の企画・制作に指導的な立場でかわっていらつしやいますが、文化会館の運営の現状に関してどのようにお考えでしょうか。

●衛 問題点の一つは評価の仕方です。経済効率と同様の考え方でホール運営が評価されている。いくらの入場料で何人が入場したかというような、量としてのアウトプットが重視されがちです。文化というのは、むしろ社会的な効率とか効果、質としてのアウトプットで評価されるべきです。ただし、こうした効果は即座に現れるものではありません。五年、一〇年かけてどういう社会的な効率、効果が生じるかという視点が文化会館に求められるのです。

もう一つは行政の側の考え方です。ホールを使ってもらうことを住民に対する基礎的なサービスと考えるか、選択的なサービスと考えるか。私は基礎的なサービスと考えるべきだと思うんですね。選択的なサービスとなると、文化会館が一種の好きな人間だけの場所ととらえられてしましますし、選択的サービスに対しては料金は高くてもよいということになります。

今は小出郷の文化会館の館長もなさっています。小出郷の文化会館は、まさに住民による手づくりの文化会館であり、住民と一体になった経営をして特色ある小出郷の文化を創造しているという意識込みをお持ちだと伺っているんですけれども、先生のお考えはいかがですか。

●桜井 私の本業は木工で、芸術に関しては素人同然なんです。雪国に生まれて、雪国を文化だと考えているんです。人真似が嫌いで、家づくりにも、雪国での住みやすさを考えて新しい住宅開発に取り組んでいます。

そのかわり、地域の音楽活動や祭、イベントなどいろいろなことを旗振ってやってきたんです。東京のような文化活動や文化会館がこちらの地域にも欲しい、そうしないと都会とこちらの田舎で文化の開きがものすごい勢いでついてくる。こう考えて、手づくりの住民のコンサート活動を一〇年間続け、文化会館を建てるためにも走り回ってきました。そんな活動を見て、町長さんとか県議の皆さんの力で、五年前に、人口四万七〇〇〇人の二町四村の広域行政単位で文化会館を作ろうじゃないかという動きが始まったわけです。うれしかったですね。

つてしまします。文化活動を通して、今まで会ったことのない人間や親しくしゃべったこともない行政の方とか、あるいは芸術家の方とお話をする機会も生まれます。そういう生活の中での文化の在り方みたいなものを得ていくサービスと考えた方がいいと思うんですね。

地域の芸術文化団体への支援を基礎的なサービスと考えれば、地域の文化的なものを担っている芸術文化団体に施設の長期利用とか定期利用、優先利用を認めないことは、文化会館の持つ力を相当弱めることになります。

それから、住民がどれだけホールを担う人になっていくかが大事です。福井県の今立町にある「いまだて芸術館」がうまくいっている例の一つですが、それ以外に、北海道演劇財団設立期成会のシアター・ボランティア・ハンズというグループが、目の不自由な方でも芝居が見られるような様々な形で活動しているのを見たこともあります。

会館の職員が生きがいを感じながら仕事ができるかどうか大事ですね。仙台演劇祭でのことです。ワークショップで初めて演劇する子供たちの練習に会館の

けれども、町長さんや村長さんに「ホールを建てるコンセプトは何ぞや。」って聞いたら、「いや、そんげの何でもなしおら作るばかり。」って聞いたら、あとはどうするんです。って聞いたら、「そんげのわからん。」なんて話なんです。それで、「おいだめだ、みんなて寄って何とかしなきゃならん。」ということ、この文化会館の建設を機会に「住民による文化を育む会」という組織を作ったんです。ビジョンがないんだって考えようじゃないか、住民の要望を設計に入れようじゃないかということをやってきました。そこに行政の文化会館の担当の方が、「おらもそんな中へかててくれ。」とか言って入ってきたんです。

設計士さんが、我々住民の意見、例えば、お母さんとか子供とかお年寄りとか障害者も使えるようなホールにしてくれ、という意見なんかを組み入れてくれて、ハードの方の要望はまあまあ十分受け入れられたと思うんです。ですが、運営のコンセプトとか企画とか、ソフトの方の要望はなかなか通りませんでした。そういう中で、私が小出青年会議所や「住民による文化を育む会」でお祭りを企画したり、六町村で作っている太鼓を使っ

た和楽器のオーケストラのための作曲に携わった御縁で、商工会青年部の皆さんや和楽器のオーケストラ団体の皆さんから推薦をいただいて館長をさせて頂いたことになったんです。

住民と行政のまん中にいるので、住民の要望はみんな私とこへ来ますし、片や行政の方は住民のことは分かんないと私のところへ来ます。住民の要望はなかなか通じないんですが、皆さんが一生懸命やってくれてるんで、住民と一体になってやれば少しずつ突破口が開けてくるんじゃないかと思っています。

日本全国どこにもない、人真似ではない企画をやりたくて、今、一生懸命です。この間も町村長さんたちから「お前さん、よくやるね。」とか言われましたけれど、このくらいやらないと文化はおもしろいのが生まれないうちで思っているんです。

●諸井 桜井さんの会館のように、自分たちで創造活動をやってて劇場が必要になったというのはすばらしいことだと思います。これはピナ・バウシュが劇場を必要としてヴッパタールの劇場を占有したというのと同じことなんです。

●佐藤 今、ピナ・バウシュとヴッパ

すね。特に市町村と都道府県というのは相当違います。役割そのものも違うんでしょうが、やはり市町村の活動は事業型である方がいい。ホール運営にしても、いかに住民と事業を進めるかということに力を注いでいかなければなりません。一方、都道府県の場合は、事業型だけを目指すと失敗します。機会均等の公演配給の考えに陥ってしまうからです。都道府県は助成型のホール運営を目指していくべきでしょう。市町村の文化活動への取組に資金を援助する形で事業を成立させてやる。これは市町村の赤字を埋めてやるという発想ではなく、その地域を文化的にするためのコストだと考えてほしい。資金を補助することだけではありません。人材育成とか観客育成を担うこともそうです。例えば五〇〇〇人の町で何かをやりたいと言ったら、それに対して都道府県から人材を派遣するとか資金を補助すると同時に、ホールの職員や事業を担う住民の人などを対象とした研修会をきっちりとしていく。観客に対しては、事前にワークショップを開いて知識も持ってもらう。これは観客の開発や育成につながるんです。こういうシステマティックな仕事の仕方が大事です。

ール舞踊団の話が出ましたが、ヴッパタール市というところは旧西ドイツの小都市で、周辺のドイツ人にしか知られていない町だったわけですね。そんな町にもオペラ劇場があるというのがドイツですが、ピナ・バウシュという振付家がこの劇場を拠点に独自の方法論でダンス・シアターという分野を発展させていった。地域の住民はこの新しいダンスにほとんど無関心だったそうです。ところがピナ・バウシュの作品はバリ、ニューヨーク、東京と世界的に知られるようになり、今ではヴッパタールの名を知らないダンス関係者はいないほどです。ここのダンスサーの構成は実に多国籍で、特にドイツ人、あるいはヴッパタール市の住民を優先して



●紀生氏

●桜井 私がいる会館の場合、予算的にも人材的にも十分なんです。けれどもホールのまわりには自然がいっぱいありますので、これを生かして、普段自然に触れる機会の少ない都会の方に練習場としてでも安く貸していきたくて思っています。そうして、とにかく本物を見せてもらいたいんです。制作したり練習してるところを見せていただきたいんです。

それを見た子供たちが感性を磨いて、あいう人になってみたいと思ってる。都会に出て育って、また帰って魚沼をよくしてほしいわけなんです。文化循環構造を作っていくんです。お互いがないものを供給し合っていくかと思っています。

●衛 地元文化団体がない、借りる人がいないというのは文化会館にとって決定的な弱みなんです。おっしゃるように、アーティストたちに滞在してもらい、創造過程を公開してもらったり、そこで初演してもらったりするプログラムを設定すれば、発想一つでそれが逆にメリットになります。

小出郷のすぐ近くの月夜野町には蚕の集中飼育施設があるんですが、養蚕業がだめになって空家になりつつあるんです。

取るということではなく、あくまでもダンス一団の質が問われる。私が今たまに話題になったこのヴッパタールの話にこだわるのは、日本では地域の文化振興に多数の住民参加という図式におさまらないと、行政は勝手にやってくれと切り捨ててしまいがちだからです。テレビの視聴率のように数で勝負みたいな面がある。文化には様々なレベルのもの、質のものがありますから、それだけを気にしていると平均的なところからはみ出るものは追い出されてしまうのです。ヴッパタールはあえてその突出した部分を市の行政がサポートした例ですが、その結果、だれにも知られていなかったヴッパタール市に今では世界中から多くのアーティストが訪れるようになった。こういった視点を持って地域の劇場を活性化させることがあってもいいのではないかと考えています。

地域の特色や資源の活用

●衛 いろいろな地域で文化活動のお手伝いをしていて分かるんですが、どの地域も全部それぞれ違った顔を持っています。

ここを町が借り上げてアーティストに貸していけば、役割を終えて不用になった空家がアトリエに変わります。アートファーム的な考え方ですね。発想次第で産業遺産も地域文化資源になるんです。町の中での芸術家とのかく自然な日常的な交流を通して公演を支えてくれる人たちが生まれてきます。これは小さな町でこそできることなんです。

北海道の富良野には倉本聰さんがいらっしゃるんですが、倉庫を三つ改造して小劇場を作ろうという構想があるんです。演劇人、音楽家というプロの人たちを再教育するキャンプを作たらどうだと言っています。富良野には使わなくなった倉庫がかなりあるので、これを改修して国内外の優れた指導者にプロの方を再教育してもらおうんです。こうした活動は、倉本さんのようにいろいろなコネクションのある人がいらつしやるからこそできることですが、地域の人的物的資源を生かしている例です。

一方、大きな町であれば、たくさんさんの劇団があることを資源として、公立劇団とか公共劇団のようなものを作っていくのもいいと思います。

こんなふうに、それぞれの町にいろん

なやり方がある。そこをどう見極めるかということも非常に大事なことです。

●諸井 そうですね。都市型の文化構造のもとでの施策をそっくり農村で真似するのはもうやめた方がいい。物事を画一的に考えるのはもうやめた方がいいです。それぞれの地域の特性を生かした運営ができなければ、きつと行き詰まりますから。

●佐藤 先ほど衛さんから、都道府県のホールは助成型の事業展開をすべきではないかとの御意見がありました。ホールや劇場によってやり方はいろいろあつていいと思います。私は今、建てられて二一年目になる神奈川県民ホールに事務局を置く、約三年前に発足した神奈川県芸



桜井俊幸氏

●佐藤 埼玉県とか神奈川県のような位置というのは、地方といっても都会的、都会といつても地方的な両面を持つていますので、ホールを使うときには、この地域というものをどのように捉えていったらいいのかという難しい問題も抱えています。都会的・地方的な両面を考えながら芸術文化活動の展開をしていくというのが、この地域にふさわしいのかなと思いつながら仕事をしているところです。

●衛 諸井さんは埼玉県、佐藤さんは神奈川県というように大都市圏ですね。大都市圏、特に東京や大阪などには、文化庁の施策の中に、芸術文化の健全なマーケットを作っていく施策が欲しいですね。例えば、公立のホールでロングランができるようなシステムづくりです。地域で



佐藤まい氏

術文化財団のプロデューサーとして事業

にかかわっていますが、このホールは財

団法人する前の県直営の時は助成型の事業

をしていました。でも時代の移り変わり

の中で住民や観客のニーズも変わり、そ

れではホールとして生き延びるのが難し

くなつていった。それで特徴のあるホー

ル運営の必要にせまられ、芸術監督を

置き、プロデューサー制を取り入れ、水

準や質を重視した自主企画に取り組もう

ということになったのです。現在のメイ

ン事業は毎年秋に行われる神奈川県芸

フェスティバルです。県民ホールを中心

に県立音楽堂やギャラリーを活用して新

オペラのプロデュースや世界的な水準

のクラシックバレエや現代ダンスの上

公演後の観客とのトークやワークショップ

、現代音楽コンサート、美術展と幅広

い領域にわたったフェスティバルにな

っています。

私が直接かかわっているのは主に現代

ダンスの部門ですが、商業ベースに乗り

にくい日本では上演の難しかったす

ぐれた作品を取り上げています。ワー

ショップの方もアマチュアというより

プロを目指す若い人たちを対象にしてい

育った舞台公演を東京で一回か二回や

って文化発信だとは言えないでしょう。健

全なマーケットを作ることとは地域文化

が育つことにつながります。

ソフトの充実

●桜井 私は、ビジョンと言うかコンセプトを、おれのホールはこれなんだというのをそこへ植え付け、もつと生き生きした、しっかりしたホールにしていきたいと考えています。

まず、ホールに宿泊施設を作りたい。各六町村には温泉があるので、そんな施設ができると地域に恩恵がないと反対されているんですが、ホールのすぐ隣に宿泊施設があつて、練習が終わつてもそこで夜中じゅう練習できて泊まれるというのが理想的だと考えています。子供たちが生き生きした感性を磨くホールにしたいというコンセプトも持っています。

それから、高齢者や障害者の人たちの利用への配慮です。おもしろい企画を考えて、高齢の方にも遊びに来てもらいたい。スロープ、点字ブロックや呼び込みなどで、障害を持つ人たちでも文化活動にかかわれるようにしたい。

たい。都市型のやり方としては、こういう取組も必要だと考えています。

大都市近郊での活動

●諸井 「彩の国さいたま芸術劇場」では、国立の劇場でやろうとしていてなかなかできないようなことをやりたいと考えています。専門性の高い劇場として、これ以上のものはないという劇場にしていきたいと思っています。広告会社などには任せないで、今のところほとんどすべて自分たちで企画・制作しています。

ただ、そうすると地元の人が使えなくなるんじゃないかと心配しています。ミュンヘンでは旅行業者が切符を押さえてしまつて、せっかくすばらしいオペラを上演していても、地元の人にはなかなか切符が手に入らないという現状がありました。そういう劇場にはならないようにしていかなければならないと考えているわけです。

その点、埼玉県は東京圏に近いので、地元の住民の感覚やニーズと、東京の専門性の高い聴衆層のそれとの間に見られる違いを強く意識しますね。

この三つのコンセプトで、都会と交流して、うちらが子供から培ってきたいろいろな文化や都会から吸収したものから新しい文化を創造して育て、発信していくんです。人づくりをしながら地域づくりをしたいなという夢があります。

●衛 諸井さんがおっしゃったように、非常に魅力的な施設を作るといふのも一つの方法ですね。

石川県の中島町には、仲代達矢さんの無名塾が一〇年間いたために作られた演劇堂があるんですが、見やすさや舞台上の工夫など、観客と演者のために実にすばらしい施設なんです。そこでやりたいという東京の劇団なんか来るんですよ。ここには宿泊施設がなかったんですが、廃校になる小学校跡に木造の宿泊施設を建設する計画があります。小さい町ではどうしても宿泊施設がないと滞在型はできません。それと一つ、産業化の視点です。小さい町では、宿泊施設や舞台技術関連などのような産業を育成したり、雇用を創り出していくことも考えないといけないと思います。今言った中島町には大工さんが多くて、大変な技術集積があるんです。舞台装置とか稽古場、宿泊施設づくりはお手のものです。

生活の中にアート、アートの中に生活があるという地域づくりが大事です。

●佐藤 劇場やホールを利用する側から、公立ホールは規則優先で、使う側の立場を理解していないという意見をよく聞きます。使い手側がホールに何を期待しているかを理解するには、管理運営するホールの職員が利用者のいいパートナーとなつて一緒に何かを作り上げていくしかないと思っています。自主企画といつても、広報の一部を除いて業者にまかすこと委託というケースがまだまだ多いというのが現状ですね。職員がもつと突っ込んで創造の現場に入っていくようになれば、相互理解も深まってどんな運営が望まれているか肌で分かってくるはず。アート・マネージメント学を頭で理解するより、現場で起こる様々な問題を一つ一つ自分の頭を使って解決していく方が、ものを創る人々をより理解できる。ホール運営をよりよいものにするにはこの共同作業が不可欠だと思います。

●諸井 それと、ハードの面よりむしろソフトの面の機構を改革することが必要だろうと思います。劇場がいつばいあるのに、それを使いこなせないということ

この協会と共催で「アートマネージメント研修」なども行っています。この研修では、会館職員が何年かで人事異動になるケースもあるわけですので、これにもある程度対応できるように研修プログラムも工夫しています。

会館運営の充実とスタッフ配置

●諸井 働く職員が専門家であるべきなのか役人であるべきなのか、あるいはプロパリの職員であるべきなのかという問題がよく指摘されます。

役人が二年ぐらいするといなくなるということについては、私はそれはそれでいいと思っています。循環する方がいいんです。県庁などの中に文化理解度の高い人をお回しすることができたらいいんです。劇場を体験して出て行った人は、別の部署へ行っても、劇場に対する理解を持ち続けていただける。いわば体験教室みたいなものですね。

それから、プロパリの職員さんはやっぱり本当のプロを雇うべきです。中途半端な人は使いにくいですね。一番致命的なのはアマチュアで、自分の好きなことしかやらないという特徴があるんですよ。

ろに問題がある。それはつまり文化に携わる人が少ない時代に、芸術なんかやる人はおかしいというふうに考えていた時代に作った機構を、いまだに引きずっているからだと思うんですよ。

こうした考え方から来る重要な問題として、貸しホールと自主事業の関係がある。空けておく時間をどれだけ効率的に利用しようか、逆に言うときいてる時間に自主事業をやろうと一般の公立文化施設は考えているんでしょうね。ですから、自主事業の予算というのははじめから非常に少なく、本格的な自主事業はやらなくてもいいということかなんてです。かと言って、私自身、貸し館事業を軽視していいと思っているわけではないんです。公立の文化会館の貸し館事業は、非常に重要な地域貢献なんです。安い値段でスタッフとともども機材も含めて借りられて好きなことをやるわけですから。そして、割合で言えば、公立なら八〇％程度を貸し館とするのが適当だと思っています。私どもの劇場で残りの二〇％と言えば、一五〇から二〇〇公演ぐらいになります。これは、一般の公立文化施設の一〇倍ないし二〇倍だと思いますが、



土居 正地域文化振興課長

自分が関心のないことに対しては非常に冷淡なんです。

●衛 ローテーション人事についてなんですが、問題の所在は、担当者が替わることによって、会館の中身と言うか運営が全く変わってしまうことにあると思います。担当者の個人的好みとか、理解の有無で変わってきてしまうから問題なんです。継続性の問題です。この点については、住民がその運営にかかわることによって改善できるんじゃないかという気がします。

●桜井 役人さんは、仕事はすごいできるんですけど、ただ文化のことを理解してない。現場が分からないということ

このくらいが限度かもしれません。もっともロングランがかけられれば問題は別ですが……。

ただ、文化にもつと金をかけるべきだということ。そして、どうせ金を使うのなら、世界に発信されるような一流の公演に使った方がいいと思うのです。

●土居 文化庁でも、文化会館が芸術文化を地域に根づいたものに盛り上げていくためには、ソフト面での充実が重要課題だと考えています。このため、来年度からは、地域に根ざした芸術文化活動を盛んにしていく、それを通じてまちづくりをするのを支援する「文化のまちづくり」事業をスタートさせる予定です。また、昨年六月に、全国の公立文化会館のネットワーク組織である社団法人全国公立文化施設協会が発足し、文化庁ではこの法人への積極的な支援を通じて公立文化会館の活性化を図っています。例えば、自主企画事業を推進する上で必要になる芸術家・芸術団体に関する情報やマネージメントのための専門的なアドバイスを「芸術情報プラザ」事業をこの協会に委託して行っています。また、会館職員のマネージメント能力の向上のため、

で、私は地域で官と民とそれから今度プロデューサーとアーティストと同じ土俵に上がって、まるつきり自分の立場を捨てての視点が事業を考えていくと成功するんじゃないかと思ってるんで、そういう仕掛けをしてみたいと思います。

●諸井 アート・マネージャーはまだ十分に育っているとは言えない状況ですから、しかるべき芸術家に芸術監督になつてもらうなどして、当分は、とことんその人からノウハウを吸収することの方が必要ではないかと思えます。そうやって、公の施設が芸術文化に目を向けていくことは、今後の日本の芸術文化を大きく変えていくでしょう。戦後五〇年がアマチュアからプロへの転換点であったとすれば、これからは本当のプロの劇場が育つ時代になったと感じています。

●土居 本日は長時間本当にありがとうございました。まだいろいろお話しただきたいことがあります。時間もまいました。私も地域で芸術文化を盛り上げていくための支援にさらに努力してまいります。

特集 社会との 連携が進む 学術研究

●巻頭言
大学の社会に対する貢献——西澤潤一

●座談会
今後の産学連携の在り方

（出席者）青山聖子／生駒俊明／植之原道行
安田幸夫／（司会）遠藤啓

●論文
産業界から大学への期待——三井恒夫
田中威子

●エッセイ
事例紹介——東京都立科学技術大学ほか

人への道
——原田康夫

教育・文化と地域づくり——東京都町田市

都道府県別——教育・学術・文化コース
神奈川県・奈良県・徳島県・大分県

編集後記

▽今月号の特集テーマは、「文化会館を核とした文化のまちづくり」です。読者の皆様の近くにも立派な文化会館ができていないでしょうか。地方にいても優れた芸術文化に身近に接することができるようになりましたし、地域に根付いた個性豊かな芸術文化活動が活発に行われるようになりましたが、反面、文化会館の中には、自主的な事業が不十分といわれるものも少なくないようです。この特集では、文化会館を核としてのまちづくりを進めるための、具体的な活動例、支援方策、今後の方向を紹介しています。

▽まもなく、インターネットに文部省のホームページができます。生涯学習、学校教育、体育・スポーツ、文化、学術、国際交流といった項目ごとに施策を紹介し、また、文部省の組織、予算、歴代文部大臣等の名簿など様々な情報を提供しています。読者の皆様にも是非御利用いただき、文部行政、文部省を今以上に御理解いただけると幸いです。

▽編集部では、読者の皆様に「読者からのたより」や「文部時報読者アンケート」をお寄せくださるよう、お願いをしているところですが、これからは、電子メールでもお受けできることとなりました。宛先名は、別掲させていただきましたので、今まで以上に御意見、御感想をどしどしお寄せください。お待ちしております。（T・K）

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んだ感想、御意見等をお寄せください。

●「読者からのたより」投稿規定
①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可） ③掲載分には薄謝進呈
※文章を一部手直しさせていただきますことがあります。

送り先
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2
文部省大臣官房政策課
「文部時報」編集部
※電子メールでも受け付けております。
宛先名「jiho@monbu.go.jp」
●「文部時報読者アンケート」
文部時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。
宛先名「jiho@monbu.go.jp」

MESSC. 61 月刊

文部時報 2月号

第1430号

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号
本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 03-5349-6666(営業部) 振替口座 00190-0-161

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成8年2月10日印刷
平成8年2月10日発行

定価550円（本体534円）（〒84円）
年間購読料6,600円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いいたします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 1996 ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。